岑參の西域生活を体験する以前と以後の詩の変遷

『胡笳の歌、送顔真卿使赴河隴』

胡笳の歌、顔真卿の使いして河隴に赴くを送る

君不聞胡笳聲最悲
紫髯緑眼胡人吹
吹之一曲猶未了
愁殺樓蘭征戍兒
涼秋八月蕭關道
北風吹斷天山草
崑崙山南月欲斜
胡人向月吹胡笳
胡笳怨兮將送君
秦山遥望隴山雲
邊城夜夜多愁夢
向月胡笳誰喜聞

胡笳の歌　岑參

君聞かずや胡笳の声最も悲しきを
紫髯緑眼の胡人吹く
之を吹いて一曲猶未だ了らざるに
愁殺す楼蘭征戍の児
涼秋八月蕭関の道
北風吹断す天山の草
崑崙山南月斜めならんと欲す
胡人月に向かって胡笳を吹く
胡笳の怨み将に君を送らんとす
秦山遥かに望む隴山の雲
辺城夜夜愁夢多し
月に向かって胡笳誰か聞くを喜ばん

【意　解】

君には聞こえないか類なく悲しいあの胡笳のしらべが。あれは紫のひげ緑の目の胡人が吹いているのだ。そのひとふしがまだ吹き終わらぬうちに楼蘭の守りについた健児たちをも深い憂愁に沈ませる。秋八月の蕭関の道北風は天山の草を吹きちぎっていよう。崑崙山の南、月がかたむきかけるころ胡人たちは月に向かって胡笳を吹くのだ。うらむような胡笳のしらべで君の門出を送ろう秦山からはるかに隴山の雲を望みながら。辺境の町の夜ごとの眠りには悲しい夢が多かろうそのとき月に向かって胡笳を誰が楽しく聞けるものか。

【語句の意味】

胡　笳　西北異民族、すなわち胡人が用いた楽器で、草笛のようなものとも、木製のものともいう。悲しい音色を特色とし、長安あたりにも持ち込まれて吹かれたらしい。

楼　蘭　漢代、今の新疆維吾爾自治区ロブノール湖の付近に中心をおいた異民族の国名。

蕭　関　甘粛省固原の東南にあった関所。

天　山　今の新疆維吾爾自治区の中央部を東西に走る天山山脈。

崑崙山　天山山脈とヒマラヤとの中間にあり新疆維吾爾自治区とチベットの境をなす山脈。

秦　山　この名の山があったという記録は見あたらない。たぶん陝西省、すなわち秦の地方の山々を総称したものであろう。

隴　山　陝西省の西端から甘粛省へと続く山脈。

【鑑　賞】

全一二句。「君聞かずや胡笳の声最も悲しきを／紫髯緑眼の胡人吹く　ときわめて新鮮なイメージの二句に始まり、以下、「楼蘭」「蕭関」「天山」と西域の地名を次々に並べて雰囲気を高め、「崑崙山南月斜めならんと欲す／胡人月に向かって胡笳を吹く」。崑崙山（天山山脈の南。チベットにある高峰）の上空に月に向かって笛を吹く胡人という、絵のような情景にたどりつく。そして、胡笳の怨み将に君を送らんとす／秦山（長安周辺の山々）遥かに望む隴山（河隴の山山）の雲／辺城夜夜愁夢多し／月に向かって胡笳誰か聞くを喜ばんと、送別の主題を浮上させて結んでいる。西域についての実感には乏しく、その典型的イメージを描くにとどまっているが、しかしそのことがかえってプラスになり、読む者のさまざまな感情移入を容易にしている。

この詩は天宝七載顔真卿が監察御史として河隴に出張するに際し、長安での送別の宴席で作られたもの。

顔真卿は後、安禄山の乱に際し、大義のために賊を討っ

て大功があったが、その後李希烈の反乱を鎮撫しょうとして、李のために殺された。玄宗・粛宗・代宗・徳宗の四朝に仕えた剛直忠義の人であった。

【作　者】岑参（七一三?～七七〇）

盛唐の詩人。荊州江陵（湖北省荊洲市）の人。太宗の宰相をつとめた岑文本は曽祖父で、代々官僚を出した家柄。天宝三載（七四四）に進士に及第し、安西節度使高仙芝の掌書記として安西武威などに行き、また封常清の節度判官として沙州、伊西など辺境（甘粛省、新疆ウイグル自治区など）で暮らした。安禄山の乱に際し朝廷に入り、虢州（河南省霊宝県）長史など官を歴任した。永泰元年（七六五）嘉州（四川省楽山県）刺史となり、任期を終えて長安へ帰る途中の成都の官舎で病死した。

杜甫とは至徳二載（七五七）、朝廷で同僚として交際した。高適とともに辺塞詩で知られる。わかりやすく修辞にも優れた作品が多い。『岑嘉州集』七巻がある。

【参　考】河隴とは

古代の西域の地名で今の甘粛省の西部説と東部説とがある。黄河の西側で隴右の地域ともいう。陝西省と甘粛省との境に隴山があり、南面すると、その右に当たる地が隴右なので、東部説が優勢と見えるが、唐・宋時代「隴右省」という行政区分はずっと西まで続いていたので、甘粛省ほぼ全域を漠然とさすのであろう。

古来異民族の侵入を防ぐために、玉門関や陽関など多くの関所や塞が築かれ、唐代に盛んに作られた「辺塞詩」の舞台となる地方である。砂漠へ通ずる道は、多く兵士たちの悲愴感を誘い、日本の「万葉集」の防人の歌と相通ずる詩情を高めるのであった。

なお岑参の詩中の楼蘭・天山・崑崙などは河隴から更に塞外へでたところの地名である。辺境を詠う詩は、このように、地理的には無理があっても辺境らしい地名を取り合わせて用いることが多い。

①（以後の例）

磧中作　岑参

走馬西來欲到天　馬を走らせて西来天に到らんと欲す
辭家見月兩回圓　家を辞してより月の両回円かなるを見る
今夜不知何處宿　今夜は知らず何れの処にか宿せん
平沙萬里咤人煙　平沙万里　人煙絶ゆ

【語句の意味】

磧　磧は砂磧。西域の砂漠は小石のまじった砂原

西　來　西に向かっていく

欲到天　中国の西北は少しずつ地盤が高くなってゆき、果てし

もなくつづいて、はては天にも到るかと思われる意

月両回円　月が二度まるくなるのは二ケ月たったこと
平　沙　広く平らかな砂漠

【意　解】

馬を走らせて西へ西へと　このまま天まで昇りそう
家を出てからこれまで二度　月がまるくなるのを見た
今夜はどこに泊ることとなるのか
万里にひろがる平らな砂地　人家の煙も見えない

②（以後の例）

「逢入京使」（京に入る使ひに逢う）

故園東望路漫漫
雙袖龍鍾涙不乾
馬上相逢無紙筆
憑君傳語報平安

故園東に望めば　路漫漫
雙袖竜鍾として　涙乾かず
馬上相逢うて紙筆無し
君に憑って伝語し平安を報ぜん

【意　解】

東に向かって、故郷の方を眺めれば、路ははるけく限りもない。
両の袖にこぼれる、涙は乾くひまもない、馬上で行き逢うたことゆえに、紙と筆との用意もなければ、
ただ君にことづてを頼んで、私が無事でいることを、都の家族に知らせてほしい。

【作品背景】

天宝八載（七四九）、安西節度使の高仙芝に書記として招かれ、安西都護府（甘粛省西安）に行く途中の作。この旅が、岑参によっての初めての西域への旅であった。彼にとって辺境の生活は、環境の風物に対する興味よりも、家族と離れて暮らす孤独を悲しむことのほうが多く、彼の辺境観の特徴となっている。彼の辺塞詩は、砂漠の戦いで高場する辺境将兵の心意気をロマンティックに歌い上げるよりも、辺境の風土とそこでの心情をリアルに写すことに特色があるのである。

③（以後の例）

送崔子還京

匹馬西従天外歸
揚鞭只共鳥爭飛
送君九月交河地
雪裏題詩涙滿衣

崔子の京に還るを送る
匹馬西のかた　天外従り　帰り
鞭を揚げて　只鳥と　飛ぶを争う
君を送る　九月　交河の地
雪裏詩を題せば　涙　衣に　満つ

【意　解】

一頭の馬が西方天のかなたの地から都に帰り行く
鞭を揚るって飛ぶ鳥と早さを競って走る

君を見送るのは秋九月交河の地のところ、すでに積もる雪の中でこの詩を書いていると涙で着物も濡れるのだ。

【語句の意味】

崔　子　崔さん。姓以外は不明

匹　馬　一頭の馬

天　外　天のかなた　すなわち塞外の地

交　河　新疆ウイグル自治区トルファン盆地にあった北庭節度使の管轄地

【作品背景】

この作品は、彼の二度目の辺境生活で作られたと推定されている。彼は天宝十載（七五一）に安西都護府での任務を終えて長安に帰ってきた。そして天宝十三載（七五四）には封常清の北庭都護府（新疆ウイグル自治区チムサールの破城市）に赴いて二度目の辺境生活を送ることになった。この詩はその時に作られたもの。

作者は都に帰る崔さんを羨んでいるのである。岑参は二度目の塞外生活であるにもかかわらず、依然として望郷の思いを棄てきれないでいる。

【参　考】「唐代胡俗の大流行」

唐代は胡風・胡俗の大流行した時代であり、それゆえに「国際的」だったといわれる。胡服・胡帽といった服装のみならず胡食・胡楽・胡粉さえも朝野の人士に歓迎されたのであり、『旧唐者』巻四五・輿服志には「大常の楽は胡曲を尚び、貴人の御饌（美食）には尽く胡食を供にし士女は皆競って胡服を衣る」とある。

【胡とは】

時代と地域によってある程度の法則性はある。前漢代までの古い時代は胡は匈奴（きょうど）を意味し、五胡十六国時代の五胡は匈奴（きょうど）・鮮卑（せんぴ）・氐（てい）・羌（きょう）・羯（げつ）に代表される北方～西北方の遊牧民を指す。しかし、過渡期の後漢代からすでにソクド人をはじめとする西域人をも指すようになる。そして魏晋南北朝時代にはまだ遊牧民を意味する方が優勢であるが、隋唐時代には西域のオアシス都市国家の人々を指すことの方が多くなる。ただし、まぎらわしいことに古い用法もそのまま残るので場合によっては突厥・ウイグルなどが胡と呼ばれることもある。要するに「胡」とは、中国に強いインパクトを与えた「外人・異国人」という意味である。

【引用文献】
新釈漢文大系　第19巻　唐詩選　明治書院
興亡の世界史05 シルクロードと唐帝国 森安孝夫 講談社
中国の名詩6王都のうた唐詩Ⅰ　前野直彬 平凡社
新編中国名詩選（中）川合康三　岩波書店
漢詩の事典　松浦友久、植木久行、宇野直人、松原朗　大修館書店
漢詩を読むシリーズ　ＮＨＫ出版